

生きる意味

羽曳野市立河原城中学校 二年

西田 有紗

「おばあちゃん。ありさだよ。」「ありちゃんよくきたね。」私がまだ小さかった頃は、いつも祖母の家に行くところの会話から始まっていた。でも、物心が付いたときに祖母の家に行くとき「誰ですか？」

祖母は「認知症」という病気になっていた。「お名前は？」「ありさだよ。」「ああありさちゃん。」初めて名前を聞かれたときはとても辛かった。小さい頃から大好きな人に名前を聞かれることが。いつからか、祖母との会話は自己紹介から始まっていた。

母から聞いた話だと私が幼少期の頃、祖母とは月に一回の頻度で会っていて、よく私をベビーカーに乗せて兄と三人で公園へ散歩に行ったり、家の近くにあった不二家に連れて行ってくれたらしく、そんな祖母が大好きだったらしい。しかし、父の都合で引越すことになり、月に一回会えたのが、年に三回会えるかどうかになってしまった。引越してから、祖母の家に行くときは従兄弟も必ず来るようになった。それからは、従兄弟と遊んでいて祖母と遊ぶことが少なくなった。それと同時に認知症の症状が現れ始めていて、認知症のことを知らなかった当時の自分は少し怖かった。

認知症の症状が現れてから数年経った頃、母と祖母が電話しており「元気？」「今どこに住んでるの？」と同じことを何回も繰り返して聞いている。母は笑いながら応えて、祖母は何回も嬉しそうに初めて聞いたリアクションをしていてとても楽しそうだった。その電話から数日経った頃、母と祖母はまた電話をしていた。どうやら保険証を失くしたらしい。母は「棚のどこに置いてない？」

「かばんの中とかは？」など、ありそうな場所を言っていたがなく、「大事な物は見える場所に置かないとだめ。」と、母は少し強めに言っており、祖母は「はい。」と悲しそうな声で応えていた。また、祖母の家に行ったときに私が風邪をひいていて、薬を飲むのをいつも忘れていたため、見えるところに薬を置いていた。母は祖母に「捨てちゃだめだからね。」と言っていた。次の日、薬を置いていた場所を見ると薬がなく、祖母に聞くと捨ててしまったらしい。母は「大丈夫大丈夫。」と慰めていたが、祖母は悲しい顔をしていた。祖父から話を聞くと、祖母の記憶が曖昧なことで意見がすれ違い喧嘩になってしまいうらしい。私は祖母の悲しい声や悲しい表情が辛く、少し距離をとってしまいううになった。

ある日、ふと考えてみた。「いつか自分が認知症になって記憶がなくなってしまう、誰からも必要とされなくなったら生きる意味はあるのだろうか」と。

検索してみると「認知症の人の生きる意味と目的」という記事があった。読んでみると「認知症になったら人生終わり」と多くの人が思っている」自分と同じ考えの人がたくさんいるんだと思った。読み進めていくと、ある一文に目が留まった。「時々外来で高齢の方が言葉にすることは先生、もう死にたい。殺してください。理由は、みんなに迷惑かけたくない、生きていても仕方ない。」この文を読んだときに、祖母も同じ事を思っているのだろうか。自分には何が出来るか。そのとき思った。自分は認知症に恐怖心を持っているから認知症と診断された人の気持ち进行他人よりも理解できているからこそ支えられるんじゃないかと。

認知症と診断され、世界が真っ白になってしまいかもしれない。白は何色にも変われる。だからこそ難しい。いろいろな人生を歩んで、いろいろな色に染まって。でも、少しずつ忘れてしまつて。不安や恐怖に襲われて最後は黒色に染まってしまいかもしれない。しかし、一つだけ明るい色を取り戻す方法があるとするならば、また、白を塗ればいい。黒に負けないぐらい白い絵の具を垂らせばいい。どんなにベチョベチョになつたつて、白を取り戻せるのなら。

いつか私は祖母や、未来の利用者さんの横で寄り添い、「生きる意味」が分からなくなつたのなら一緒に「生きる意味」を探し、白を塗れる存在になる、そんな介護福祉士になりたいという夢を持った。